

## カダザンドスン(Kadazandusun)族とヌスクラガン(Nunuk Ragang)の祭事について

サバ州は、マレーシアで最も多様な人種が住んでいる所である。そこでは原住民族であるカダザンドスン族の比率が第一位であり、華人がそれに続く。一口にカダザンドスン族といっても 30 以上の支族からなる多部族である。20 年ほど前にサバ州の殆どの原住民族のコミュニティの代表による会合において、「自ら民族のアイデンティティをカダザンドスン族と称する」ということが決定されたそうだ。方言こそ異なるが同一言語と文化を共有していた部族が統一された。カダザンドスン文化協会(KDCA - Kadazan-Dusun Cultural Association)という組織がこの多部族文化の保存、発展、強化および普及に傾注しており、この協会は、以前サバ州の主席大臣であり、現在副主席大臣である Pairin Kitingan により率いられている。Pairin は、カダザンドスン族の Huguan Siou (最高指導者) である。

カダザンドスン族の先祖は、現在 Nunuk Ragang の記念碑が建っているあたりに住んでいたという。それは、ラナウからサンダカンに向かう高速道路を 50km 位走った二つの川が合流する地点にある。Nunuk とは、カダザンドスン語で菩提樹(banyan)を意味し、Ragang は、「赤い」を意味するので、Nunuk Ragang とは、「赤い菩提樹」ということである。伝説によると、昔、この地に巨大な Nunuk Ragang が立っていたそうである。彼らの祖先は、川で水浴し、この木の枝に大勢が腰掛けて日光浴をしたという。その様子を遠くから見ると木の頂が赤く見えたという。また、木の樹液で水溜りの水は赤く染まり、沐浴する人々の皮膚病を治したともいう。この地で彼らは大いに繁栄し、文明を築いていた。Nunuk Ragang の地は、カダザンドスン族発祥の地であり、文化的に見て重要な旧跡である。Nunuk Ragang の文明は口承により現在に伝承されているが、それ以前の歴史を遡ることは難しいようだ。Nunuk Ragang で謳歌した彼らの文明は、種々の理由により、サバの各地に離散し、多部族カダザンドスンコミュニティを形成するに至ったということのようである。KDCA は、現在および次の世代のカダザンドスン族に彼ら多部族のユニークな文化的ルーツや歴史および伝統を再認識させ、浸透させ、民族としての誇りと尊厳を持って生活するよう知育することを目的に、毎年、この地を訪れ、式典と祭事を行う。Huguan Siou を讃える儀式も、この式典で行われる。

本年は、7 月 5 日に開催され、Dr. Othman のご好意により VIP 待遇で参加させていただいた。スラゴンホームステイを運営される Othman 夫妻はカダザンドスン族であり、Dr. Othman は、この記念行事の実行委員長である。大きなイチジクの木を模した Nunuk Ragang 記念碑の幹の中で、中央の玉座に座った最高指導者 Pairin と民族衣装で着飾った人々により、一連の儀式が執り行われた。彼らの言葉が理解できず推測にすぎないが、いくつかの部族により、それぞれに伝承される部族の由来について節を付けて語られているようであった。儀式のクライマックスは、色鮮やかな大きなケーキの上にともされた蠟燭の火を Pairin が吹き消すことであった。その後、屋外に設えられた舞台の方に移動し、関係者の挨拶、演奏やのど自慢、踊りなどの祭事が行われた。Pairin と Dr. Othman の挨拶の中で、私達夫婦は日本から来たゲストであるとして紹介された。竹で作られた民族楽器によるオーケストラの演奏は印象的であった。雅楽で使われる「笙」に似た Tombotuon や Seruring という横笛などの形状、音色、音階は、日本のものとよく似ている。伝統的な楽器だけで

なくサキソフーンも竹で作られていた。米から作る酒(Tapai)がふるまわれ、ほどよくアルコールが回った頃に、参加者も舞台に上がり、民族舞踊を踊りだす。Pairin 夫妻, Othman 夫妻, 家内も歌や演奏に合わせて壇上で踊っていた。私は、その数日前に腰痛を起こしたので見物だけにとどめた。明るく陽気で平和なお祭りである。屋台も出て、食べ物、民芸品、衣服などを販売していた。若者によるトライアスロンもどきの競技も行われた。竹馬に乗り、走り、タイヤを浮き輪にして急流を川下りして、総合の速さを競うというものである。Nunuk Ragang の行事は、少し規模の大きな村祭りというような印象である。ケニンガウにある、先生を養成する大学の学生達も団体で見学に来ていた。レジャーで参加したのではなく、民族の文化を知るために授業の一環として参加したということであった。

カダザンドスン族は、農耕民族であり、米を主食にする。スラゴンホームステイでもよくご飯がだされる。Othman 夫人の料理は何れも口に合う。今回、スラゴンホームステイで珍しい野菜をたくさんいただいた。バナナの花、生姜の花、サワーマンゴ、ジャックフルーツ等のサラダは美味しかった。生魚を酢漬けにした料理(Hinava)も美味しかった。他の料理もそうだが、味付けに全く違和感がない。ある日本人が持参されたソーメンや蕎麦にかき揚げを加えてランチパーティが催された。Othman 夫妻やスラゴンホームステイのスタッフは、海苔を散らした蕎麦やソーメンおよびかき揚げをつゆにつけ、美味しそうに食べていた。また、人参、ツナ缶および卵を素材にした沖縄料理「シリシリ」を作ったところ、これも好評であった。日本人とカダザンドスン族は、容姿がよく似ていると言われるが、それだけでなく、味覚や音感なども似ているようだ。

カダザンドスン族は、キリスト教を信じる人が多いが、イスラム教徒もいる。19 世紀の中頃キリスト教が伝えられる以前は、アニミズムが支配的であった。Othman 一家は、ムスリムゆえ、スラゴンホームステイで豚肉を食すことはできない。

米作の影響を強く受けている彼らにとって毎年 5 月にサバ州全土で行われる収穫祭(Kaamatan)は、最も重要なお祭りのようであり、カダザンドスン族の多様な文化を知る好機のようなものである。お祭りでカダザンドスン族の美人コンテストが行われる。民族の伝統と誇りを伝えるため KDCA を中心にして、いろいろな活動が行われている。Othman 夫人から来年はこのお祭りに参加することを強く勧められた。

以上